

中村医師の事業と希望は引き継がれた

——しかし、アフガニスタンの危機は続く

PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)総院長／ペシャワール会会長

村上優まさる

はじめに

中村哲医師は二〇一九年十二月四日に亡くなりました。悲報の直後にPMSとペシャワール会で確認した誓いは、三年を経た今、実現できたのでしょうか。力と勇気を与えてくださった支援者の皆様に感謝を述べ、検証する機会とします。

中村医師が繰り返し返し「そしてアフガニス

タンは忘れられていった」と語ったように、二〇二一年八月のタリバン復権後、アフガニスタンをめぐる喧噪は過ぎ去り、干ばつは無視されたまま、時に女子教育の遅れについて報道されるだけとなりました。

しかし欧米による経済制裁は厳然と継続し、アフガニスタン経済の混乱は危険水準にあるままです。銀行送金はドル建てでアメリカを経由する必要があるために、またい

つ制限が強化されるか案じられる日々です。未だアフガニスタン・イスラム首長国(タリバン政権)を承認する国は数少なく、大国への思惑からか、イスラム諸国協力機構(OIC)に属する国からの承認も進んでいません。救いは在アフガニスタン日本大使館が欧米諸国に先駆けて一部再開し、交流の窓口ができたことです。

治安は大きく改善しても、ISや軍閥の動きは散発しています。地震や、温暖化による干ばつと洪水が息継ぐ間もなく襲っています。その結果、深刻な飢饉が危惧されています。

それでもアフガニスタンの人々はずっと地を這うように生き続けているのです。少なくともPMSが活動しているナンガラハル州では懸命に働いている人々の笑顔を見ることができます。



ガンベリ農場で収穫されたレモンの選別作業。(2022年9月27日)

PMSの事業

①医療 ダラエヌール診療所では医療スタッフが活発に働いています。中村医師が亡くなっても、タリバン政権になっても、新型コロナウイルスが猛威を振るっても、干ばつによる飢餓が来ても、洪水や、その結果の汚い水に起因する下痢症(コレラを心配した)が増えても、工夫をし助け合っ、そして日本からの支援によって、この地にある人々の命を支えています。ナンガラハル州の多くのクリニックは一時期危機に瀕

し、今でも十分には機能を回復していません。そのなかでダラエヌール診療所は変わらぬ診療を続けて、人々に安心を届けてきました。今年一月末にはナンガラハル州南部の食糧配給を医療チーム中心で行ないましたが、今度はユニセフに協力して地域の重症栄養失調児への支援を行なう準備を始めました。この冬のナンガラハル州全体での飢饉と食糧危機を注意深く見守り、必要があれば食糧支援を再開します。

②農業 ガンベリ農場二三〇ヘクタールの開墾が進み、防砂林をめぐらして砂嵐などを避けながら、マルワリード用水路からの水の供給を受けて農業は順調です。今年はお麦、米、レモンなどの柑橘類を収穫、ナツメヤシの実がなり、養蜂、酪農も堅調です。救荒作物サツマイモの栽培にも再挑戦しています。

二〇〇八年にダラエヌール溪谷の試験農場は大幅縮小を余儀なくされました。原因は干ばつの進行、事態を悪化させた軍事介入と独善的「復興支援」、これを支えた心ない者たちでした。しかし、中村医師はマルワリード用水路で潤うであろうガンベリ沙漠での「自立定着村」を構想し、難民が帰農する日を夢みました。この時の顛末は『アフガン農業支援奮闘記』(高橋修編/橋本康範・伊藤和也・進藤陽一郎・山口敦史著、石風社、二〇一〇年)に記されており、サツマ

イモ誕生物語も登場します。希望は引き継がれたのです。

③灌漑 二〇二〇年に始まったバルカシコート事業は、九月に完工して大きな成果をあげました。ジア先生をはじめ、PMS技師団と日本のPMS支援室・技術支援チームが一体となって完遂しました。それを見守り後押しをしたのは支援者の皆様です。中村医師(PMS)が手掛けた十一の堰や用水路、その周辺の護岸の維持管理事業も並行し、住民もアシャル(奉仕活動)で用水路浚渫を実施し、達成感と感動を分かち合いました。バルカシコート堰に付帯して溪谷に設置した二七基の砂防堤は初めての試みですが、今年の豪雨にも土石流を緩流化させ、一定の成果を上げました。

一つの成功は次への期待と、取り組むべき動機につながります。二〇二二年十月よりナンガラハル州のコット地区で、約四・三kmにわたる用水路を引いて灌漑する工事が始まりました。難工事が予想されますが、住民からの期待に後押しされて手掛けることになりました。

また、PMS方式灌漑事業の候補地としてゴシュタ(ナンガラハル州)とヌールガル(クナール州)などがあり、来年度の着工に向けて選定されます。この事業はJICA(国際協力機構)/FAO(国連食糧農業機関)/PMSの共同事業になる予定で調整され

ています。

ヒンドゥークシユ山脈周辺の干ばつと洪水

今年の干ばつと洪水のありさまは二〇一〇年のそれを思い起こさせます。同じようにモンスーンの影響を受けた豪雨で、アフガニスタンに大きな被害を与え、パキスタンでも更に大きな爪あとを残しました。

被害を大きくしたのが「氷河湖決壊洪水」です。二〇一九年にネパールにある国際総合山岳開発センター（ICIMOD）が次の

ように報告しました——地球温暖化でヒマラヤからカラコルム、さらにはヒンドゥークシユ山脈に五万六千ある氷河が融解し始めており、二一〇〇年までにその六四％が融解して消失する——。

この氷河が貯えている淡水は北極・南極と並んで地球の気温安定に大きな役割を担っており、山脈地帯や川の流域で暮らす十億人に水を供給し、食糧を提供する源です。中村医師も再三、山に降る雪の大切さを述べていました。

中村医師はペシャワール会報一〇五号（二〇一〇年九月）で二〇一〇年洪水を報告しています。そしてこの洪水レベルを基準として堰や護岸工事を見直しました。そのために今回の洪水では、村々は大きな被害を免れました。二〇一〇年当時の中村医師の認識と危機感は今に生きているのです。

中村医師の一〇五号報告を再掲します。政治情勢を含めて、繰り返しアフガニスタンの苦悩と再生への意気込みをお読みください。